

・ < 論考 >

1 . スポーツ・ナショナリズム・公共圏

- アパデュライのポストナショナルなスポーツ論について -

鬼丸 正明

0 . はじめに

先にわれわれはスポーツにおけるグローバルな公共圏の可能性を提起したが(鬼丸、2006a)、グローバルな公共圏、あるいはグローバルな市民社会そのものの可能性については様々な異論が提出されている。その中の代表的なもののひとつは、「公共圏」「市民社会」はあくまで近代国家を前提とした概念でそれは「国民 - 国家 Nation-State」の枠組みを超えられない、グローバルな公共圏、グローバルな市民社会なるものはユートピアに過ぎないというものである。多言するまでもなく近代スポーツはナショナリズムと密接な関連をもってきた。スポーツにおける公共圏の可能性を探求する我々にとって「ネーション」「ナショナリズム」の問題は実践的理論的に大きな問題であることは間違いない。

この間、「ネーション」「ナショナリズム」の問題を主題化させて議論してきている理論的潮流のひとつが「ポストコロニアリズム」であるが、その中で「ナショナリズム」に対して独自の議論を展開し、そしてスポーツに対しても理論的関心を向けている(そして更に加えれば「ディアスポラな公共圏」論を展開している)論者がアルジュン・アパデュライである(註1)。彼の理論に言及するスポーツ社会学者も多い(J. Maguire, *Global Sport, Polity*, 1999. やグットマン『スポーツと帝国』にその影響をみることができる。これについては(鬼丸、2006a)参照)。本稿で彼のスポーツ論を検討して、「ナショナリズム」「公共圏」の問題について再考する契機としてみたい。

以下、アパデュライのスポーツ論を先ず紹介し、次にアパデュライ理論を解説した吉見の議論を要

約して、最後にアパデュライ理論について若干の検討を加える。

1 . アパデュライのスポーツ研究

アパデュライの文化理論は「切断」の理論である。彼は「国民 - 国家が近代的政治形態としてはもはや死に体である」であるとの確信のもと、現在の状況を国民 - 国家を前提とした「近代」「ナショナリズム」から全面的に「切断」された「ポスト近代」「ポストナショナル」な状況と把握する。そしてその切断の特性は移動とメディアにあり、トランスナショナルな移動によって世界中に生じた様々なエスニシティをメディアがつなぐことでディアスポラな公共圏がグローバルに発生している(ゆえに今日の文化状況は不確定で予測不可能な状況であり、「カオス理論」の人文科学版が必要とされるとアパデュライは主張する)と論じる。そしてポストナショナルな文化としてスポーツやオリンピック運動に注目する。

アパデュライの著書の一つで唯一の邦訳書である『さまよえる近代』の中でスポーツを主題的に論じているのは「第5章 近代性との戯れ」である。彼のスポーツ論を理解するために以下要約していく(引用は同書の頁数のみ)。

第5章 近代性との戯れ インド・クリケットの脱植民地化 (Playing with Modernity: The Decolonization of Indian Cricket)

アパデュライはまず、旧植民地にとって脱植民地化とは過去との対話である、この対話が孕む複

雑性や両義性がもっとも如実に現れるのはクリケットの変遷においてであると述べ、以下のように議論していく。

現在政治・経済の分野においてイギリスとインドの関係はほとんど意味をもたない。

「だが、今日のインド文化のなかにもなお、永遠にイギリス的であり続けるように思えるものがある。それがクリケットである。それゆえクリケットにおける脱植民地化の力学は検討に値する。なぜなら、植民地であった過去との結びつきを断ち切ろうという衝動が、この領域においては、もっとも希薄に映るからである。」(165頁)

クリケットの土着化のプロセスを把握するもっともいい方法は「ハード」な文化形式と「ソフトな」文化形式を区別することである。ハードな文化形式とは、文化にともなう価値・意味・身体的実践の連関が打ち壊すことも変容することも困難である文化形式をさし、これに対してソフトな文化形式とは、価値や意味から身体的実践を分離することが比較的容易で、またそれぞれの項の変容も比較的うまく達成される文化形式をさす。

「クリケットというのは、それ自体が変容するというよりも、むしろ、そこへと社会化していく人びとの方を容易に変容させる、ハードな文化形式なのだ」(165頁)

植民地時代の居住地域

クリケットはヴィクトリア朝のエリートの価値観を凝縮したものである。「クリケットは男性的な活動の典型であり、それが表現するコード　たとえば、スポーツマンシップ、フェアプレイの精神、ピッチ(フィールド)上の選手による強い感情表現への徹底した抑制、個人の感情や利害に対する集団の感情や利害の優先、チームへの紛れもない忠誠　は、男性のとるべきふるまいのすべてを統御すると考えられていた。」(168頁)

クリケットはヴィクトリア朝エリートにとっての社会化の中心的手段となる一方で、当初からある社会的矛盾を内包していた。クリケットのスポ

ーツ協会は当初から階級を超えて創出されており、そこには下流・中流の腕の立つ者が参加していたのである。

「下流階級を出自とするプロ選手が勝利のために必要とされる汚い従属的(サバルタン)な機能を果たしたからこそ、上位の階級の者たちが紳士的で非競争的なスポーツという幻想を保つことができたのである。」(169頁)

この本質的矛盾はインド・クリケットの最初期にとって重要な問題となる。

19世紀インドではクリケットは人種分離的なスポーツであったが、同時にインドの植民地体制においてクリケットは国家的な文化政策のための非公式的な手段でもあった。

「彼らにとってクリケットとは、帝国の結束を強固にし、多様をきわめるインド人「共同体」間の国家関係...を円滑にしてくれ、男らしさやスタミナ、活力というイギリス的理想を、怠惰で気力も精力もないと見られていたインド人集団へと植えつけるものであった。」(171頁)

インドのクリケットがインドの王侯に保護された時期はクリケットの土着化にとって重要である。クリケットを支援した王侯は、インドの貴族社会では下流に属した。インドの下流王侯にとってクリケットは臣下にスペクタクルを与える手段であり、同時にイギリスにとりいる手段でもあった。そして王侯によるクリケット選手への保護は、(下層出身の)クリケット選手が世界的に活躍しコスモポリタンな世界に参入するために決定的な役割を果たし、インド・クリケットに階級的複合性をもたらした。「クリケットのインド化を支える土台となったのは、それゆえ、インド駐留のイギリス人紳士、インドの諸侯、移動するインド人らの複雑な交差がおりなす階層性だった。」(175頁)

クリケット、帝国、国民

今日のクリケット人気の高まりはクリケットとナショナリズムの結合があることは明らかである。しかし初期のインド・クリケットにおいては宗教

的（共同体的）アイデンティティに向けられていた。19世紀中葉から1930年代までのイギリス統治下のクリケットは、ヨーロッパとは対照的に、群衆が自らをヒンドゥー教徒やイスラム教徒であると考えるアリーナであった。しかし1890年代以降、「インド」チーム編成の必要性は植民地に「インド」捏造の必要性をもたらした。20世紀の最初の30年間にインドにクリケット・ナショナリズムが興隆する。この時期はインド国民会議派（マハトマ・ガンディーらの独立派）が勢力を拡大した時期でもあった（しかし、両者の間に明白なコミュニケーションはほとんどなかった）。

現地語化とメディア

「メディアはクリケットが土着化していく上で決定的な役割を果たしてきたが、その端緒は一九三三年に全インドによって始められたクリケットの英語実況放送である。」（183頁）

1930年代から1950年代までラジオ放送は主として英語でなされた。1960年代になると現地語（ヒンディー語、タミル語、ベンガル語）ラジオ放送が増加する。この英語のクリケット用語の現地語化はクリケットの大衆化の唯一の主要な装置であり、クリケット土着化の大きな要因となった。そして1960年代後半のテレビの登場はインドのクリケット文化を一変させる。テレビは国際的なクリケット選手への賞賛を高め、クリケットへの国民的熱情を深化させた。そして一方「観客による受容や参加という視点から見たとき、ラジオ実況放送とテレビ視聴の双方を補強してきたのは、英語ばかりでなく現地語で記された書籍や新聞報道、スポーツ雑誌の著しい増加なのである。」（187頁）「書籍や雑誌、パンフレットによって、現地語と英語が架橋され、外国人選手の写真や氏名がインドの台本と統語論へと組み込まれ、ラジオで耳にする一群の混成語（ヒンディー語、マラーティー語、タミル語へと音訳された英語の語彙）が確たるものとされるからである。...このプロセスから得られる語彙目録によって多数のインド人が慣

れ親しんだ言語形式でクリケットを経験することが可能になっている。その結果、最初期のクリケットに倫理的権威と策謀を与えていた、あのほかならぬイギリス性から、クリケットは解き放たれたのである。」（187-8頁）

クリケット用語の現地語による習得は、クリケットに求められる身体的能力への意識を高め、それがテレビによって強力に煽られる。英語だけによっては支障のあるインド人の言語能力や図像化能力を高め、クリケット用語を言語使用ならびに言語経験の場としての身体に結びつけていった。この現地語は、クリケットを取り巻く名声や論争、スポーツ外の状況といった大きな世界に引きずり込まれ、クリケットは慣れ親しんだ言語領域のさらなる深層に埋め込まれる。

そしてヒンディー語雑誌のクリケット選手はコスモポリタンな輝きに満ちた世界の中にいる。「準英語文化圏の読者によって消費されているクリケット文化が、明らかにポスト植民地的で多国語的であることは、およそ疑いの余地がない。」（190頁）現地語の新聞雑誌の記事が語る、スター選手にまつわるクリケット生活の物語はクリケット関連のラジオ放送やテレビ放送の受容に新たな深みをもたらす基盤であった。

「メディア経験のもつ一般的な力は身体感覚的なものなのである。...日常生活の中でのクリケット体験や、折りにつけ目に触れる...クリケット・スペクタクル これらすべてが結託して、クリケットを現地語化するとともに、クリケットの主だった語彙や譬喩を多くの若きインド人男性の身体的実践や身体と結びついた夢想のなかに埋め込むのだ。」（191頁）

帝国の逆襲

1950年代以降、大企業はクリケット選手への援助と引退後の雇用をもたらした。これは社会的広告活動の有効な形式でもあり、インドの都市のみならず、下層階級出身の青年のクリケットへの大きな誘因となった。そして州によるメディア支援

の拡大はインド独立以降、クリケットを国民的熱狂の対象へと変容させる基盤となった。

テレビ放送後のクリケットは商業化とスターの商品化そして勝利を至上命題化させていく。そして1971年を転機に1980年代、世界的強豪としてのインド・クリケットが誕生する。この植民地の有色の肌の国が世界のクリケットを支配した時期とは、メディアや商業化、国民的熱狂の衝撃によってヴィクトリア朝の古き作法が完全に払拭された時期となる。

「クリケットが脱植民地化されるためには、ヴィクトリア朝的な倫理という装いをクリケットが脱ぎ捨てなければならなかったのだ。」(196頁)

現在のインド・クリケットにおいては試合のルールと行動は依然としてヴィクトリア朝の価値観が支配している、しかしナショナルなものへの忠誠心がこの対極にあり、勝利を望む観客と視聴者、一方選手やプロモーターにとってはヴィクトリア朝のコードやナショナリズム的な関心は金銭や名声に従属している。

英連邦は今日、政治や貿易にとっては茶番にすぎない、しかしスポーツ共同体となって存在しているのである。「英連邦はもはや、黒や褐色の肌をした人びとを社会化し、帝国の公なるエチケットを習得させる装置などではなく、トランスナショナルなスペクタクルや商品化に供するようなナショナルな情操を動員する装置なのだ。」(200頁)

結論 近代性的手段

最初の難問に立ち返ろう。ハードな文化形式としてのクリケットはなぜこれほどまでにインド化したか、脱ヴィクトリア朝化したか。

「それは、(書籍、新聞、ラジオ、テレビを通して)クリケットが現地語化されていくプロセスの中で、クリケットは、実践としてインド人(男性)の身体に刻印されていくと同時に、インドの民族=国民性の象徴にもなったからである。」(204-5頁)

ここでの脱植民地化はアンダーソンのいう出版資本主義の作動によって想像の共同体が創出され

たということにとどまらない。「それに加えて、擬装された身体的技法が流用されることによって、そのように想像された共同体に、情熱と目的が付与される、ということをも意味している。これこそがおそらくは、(他の多くの公共文化とは対照的に)観客スポーツが、脱植民地化の力学に対して果たした貢献なのである。」(205頁)

しかしやはりなぜクリケットなのかという疑問が残るだろう。私は一足とびにこう答える。クリケットは国民的注目やナショナリスティックな情熱にとって理想的な中心なのだ、と。

国家(を構成する集団)にとってのクリケットは、ナショナリズム的な情報を操作することが可能だという感覚を与え、メディアを直接支配する集団にとってのクリケットはメディアを統制するための力があるという感覚を与え、私企業にとってのクリケットは商品化と販売促進の手段を手に入れているという感覚を与える。視聴者一般にとってのクリケットは、ワールド・スポーツに対する文化的教養という感覚、コスモポリタニズム、国家間の競争への関わりという快楽を与え、アッパーミドルクラスにとってのクリケットはスターダムとナショナリズム的な情操をリビングルームという安全で衛生的な環境に持ち込む、快楽の私生活化を与え、労働者階級やルンペンに属する青年にとってのクリケットは(イングランドのフットボールのような)集団への帰属、潜在的暴力、身体的興奮の感覚を与え、田園地方の視聴者にとってのクリケットはスター選手の生活、国民の運命、都市の熱情を支配している感覚を与える。以上すべてにおいてクリケット(の内包する近代性的手段)がかかわるのは、様々な利害の合流であり、クリケットの生産者と消費者が多くの分裂的な傷跡を残さず、インド人的なるものの興奮を共有することができる。

「最後に、おそらくもっとも意識されていないことだろうが、クリケットはこうしたすべての集団と行為者に対して、言語や身体、行為性(エージェント)の水準を始めとして、競争や財務、スペクタクルの水準にいたるまで、クリケットの試

合を乗っ取り、イギリス的なハビトゥスを植民地のそれへと転換したという感覚を与えている。」(206頁)

そして最後にアパデュライは、クリケットがなかったら間違いなくクリケットに類する何かが発明されていただろうと述べて、この論文を終えている。

2. 吉見俊哉のアパデュライ評価

最初に述べた通り、この邦訳書『さまよえる近代』には吉見俊哉による解説論文がつけられている。アパデュライの理論を検討する前に以下その「グローバル化の多元的な解説のために アパデュライの非決定論的アプローチ」を簡潔に要約しておく(以下、同論文からの引用も同書の頁数のみ)。

アパデュライはグローバル化のフォーメーションをエスノスケープ、メディアスケープ、テクノスケープ、ファイナンススケープ、イデオスケープという5つのスケープが矛盾と分裂を含みながら重層していく過程としてとらえる。「スケープ」という接尾語をつけたのは、それらがどこからでも同じに見えるのではなく、諸レベルの主体の位置に応じて異なる仕方で屈折して想像されることを示すためである。

アパデュライが本書で示したグローバル化の乖離構造(註2)が示したものは近代的な主体性の生産が不安定にされている状況である。すなわちグローバル化の過程で人、技術、資本、イメージ、知識の描く軌道はますます非同型的になっていることが示されている。

「このようなイメージと人々が流動的かつ乖離的に出会う世界でこれまでになく力を帯びてくるのが想像力であると、アパデュライは繰り返し強調してきた。…想像力はいまや、労働の形式や社会的な実践の諸空間とグローバルな可能性の空間が交渉する形式となり、あらゆる社会的主体にとって中心的な作用を及ぼしている。」(370-1頁)

この想像力は現在国民国家との結びつきを弱めている(=「ポストナショナル」)。

「現在、資源やイメージ、観念の新たなフォーメーションを促していくさまざまな強力でオルタナティブな組織体が立ち現れつつあるのである。これは同時に、領土的国家から分離した仕方での「祖国」へのトランスナショナルな欲望が促されていく過程でもある。したがってわれわれは国民国家やその相互作用の外部に浮上してきている多様で越境的な組織体やイデオロギー、ネットワークに注目し、それらと国民国家との乖離的な関係を解明していかねばならない。」(372頁)

想像力の作用を明らかにするためには、フランクフルト学派やベンヤミンの知見、アンダーソンのナショナリズム分析、集合表象や欲望についてのデュルケームやフロイト、ラカンの洞察が総動員されねばならないとアパデュライは主張する。とりわけカルチュラル・スタディーズは重要な拠点となる。

吉見は他のグローバル論者(カステル、ネグリ-ハート、シラー、サイド)の理論を紹介した後、これらの論者とアパデュライの差異を指摘する。双方は新たに浮上しつつあるトランスナショナルなシステムの秩序の把握において異なり、他の誰よりも、アパデュライは新たな構造体の多次元性、フラクタルな非決定性を強調している、とする。

「アパデュライは、新しいグローバルな秩序が複合的で、重層的、乖離的な傾向を持つと考えている。グローバル化は、いわば構造的な非構構性、経済と文化、政治の乖離構造やさまざまなスケープの分裂とずれ、脱構造化の契機を幾重にも内包している。この乖離的な構造が、今日のグローバル化を予測しがたいものにすると同時に、さまざまな近代的主体の生産を不安定にしているのである。」(379頁)

不安定化の最大のポイントは、グローバルメディアによるイメージ流通と大規模な人口移動にある。今日、世界は重層化・多中心化しており、国

民国家にとってかわって浮上するのは、多国籍企業でなく、世界各地の無数の NGO、国際組織、コミュニケーション圏である。これらは階層的な編成におさまらずフラクタルな運動を増殖させる。世界はこれまでになく分裂的な様相を呈している。以上のような議論によって指し示される展望は次のようなものである。

「今日のグローバル化が、人と技術、資本、イメージ、知識などが非同型的に重層する過程であり、脱配置された移動途上のオーディエンスが流動するイメージと邂逅する過程でもあるならば、そのような過程にすでに巻き込まれている自分たちの居場所、すなわち構築物としてのローカリティを探究していくには、これまでの人類学や民俗誌のアプローチを戦略的に組み直し、メディアやトランスナショナルな文化をめぐる理論的な展望を接合していかなければならない。」(382 頁)

3. 検討

以上のような要約から、クリケットが脱植民地化した過程、そしてポストナショナル化していく過程を複合的な諸力の作用過程として描きながらも中心的な役割を果たしたものとしてメディアをあげていること、ここにアパデュライ・スポーツ論の特徴があり、その理論的背景として吉見の指摘するように彼の想像力論があることがわかった。

以下でアパデュライの概念の理論的意義と背景に若干の検討を加えてみる。しかしアパデュライの専門領域である人類学、地域研究、そしてインド史、クリケット史にも門外漢である筆者の検討は極めて限定されることをあらかじめ断っておきたい。

吉見が述べたようにアパデュライの文化論の特徴に「スケープ」論がある。ジェイムズ・クリフォードが指摘するように、彼の「スケープ」論は今日のグローバルな文化を理解するための「新しい理論的パラダイム」の一つと位置付けられている(クリフォード、2002、17 頁)。この点で吉見の理論的位置付けは正当なものである。しかし吉

見の解釈に対して、ネグリ・ハートは次のように述べている。

「アルジュン・アパデュライはこれらの構造(グローバルな権力のネットワークの、高度に差異化され移動性を持った構造 鬼丸)の新しい質を、風景(ランドスケープ)、あるいはむしろ、海景(シースケープ)のアナロジーで捉えている。...この「景(スケープ)」という接尾辞によって、私たちは一方でこれらのさまざまな分野の流動性と不規則性を指摘することができ、他方で資金、文化、商品、人口統計のように異なった領域のあいだにある、形式的な共通性を示すことができる。世界市場は差異の現実政治を確立するのである。」(ネグリ&ハート、2003、199-200 頁) ここには、各次元の非同型性を強調する吉見と、共通性も指摘するネグリ&ハートの差異をみることができる。

植民地におけるクリケットが帝国の臣民化の道具から抵抗の道具に変わっていったこと、これは多くの研究に共有されている視点である(鈴木、2000)。アパデュライのスポーツ論の特徴は、その脱植民地化の過程で、メディアの果たした役割の決定的重要性(とりわけ現地語メディア)を指摘したこと、そしてメディアの身体への影響を強調したことにある。そしてメディアの身体性への着目がスポーツ論につながったのではないかと思われる。ナショナリズム・ポストナショナリズムが「想像力」によって作り上げられること(ここでアパデュライは『想像の共同体』でナショナリズムとメディアとの関連を指摘した B・アンダーソンの系譜の中にいる)その「想像力」はメディアによって形成されること、そして今日ナショナリズムは国家を超えて作動するポストナショナルな段階に移行していること、それと呼応してディアスポラな公共圏が生じていること、これがアパデュライの理論的中核をなすと思われるが、これは今日のスポーツ論・公共圏論に検討すべき論点を与えていると思われる。すなわち、国民-国家的なナショナリズムから国境を超えたポストナショナルな世界へ、国民-国家的な公共圏から国境を超えたディアスポラな公共圏へ、これがアパ

ユライの提出した論点である。

そしてこれはアパデュライだけの論点ではない。吉見は他の論考の中で「近代ナショナリズムとスポーツの関係を、国家によるスポーツを通じた大衆＝国民の統制という観点から捉えていくアプローチ」を統制＝動員論的アプローチとし、「こうした統制＝動員論的アプローチはスポーツとナショナリズムのもっとはるかに複雑な関係を過度に単純化している。」(吉見、1999、43頁)と批判した(註3)。また海老塚も吉見のこの批判をひきながら、今日グローバリゼーションによって国家が揺らぎつつあり、過渡期にあるナショナリズムとスポーツの关系到注目すべきだと述べている(海老塚、2006)。

しかしグローバリゼーションの進展にも関わらず国家は依然牢固として存在しており、国民-国家を基盤としたナショナリズムも強力に存在している。このナショナリズムを古いものとみなし、それを隠蔽・忘却することはイデオロギー的な立場としてはありうるだろうが、理論的には国民-国家的なナショナリズムとポストナショナルなナショナリズムの(切断ではなく)連続性を見ることが重要である。帝国主義時代のスポーツとナショナリズムの関連を指摘する歴史研究のアクチュアリティもここにある。アパデュライの論点は重要なものだが、この点に関しては批判的に見る必要がある。

アパデュライの「ディアスポラな公共圏」についてであるが、これに関してはアパデュライの公共圏論ではメディアを消費して生まれる身体や想像力の変容に力点が置かれており、我々の主張してきたような、批評空間としての公共圏、そしてメディアそのものを変革していく空間としての公共圏という視角はほとんどないことを指摘しておきたい。

アパデュライはラッシュ&アーリの社会理論を評価しており、我々もアーリらの社会理論を評価し検討してきた(鬼丸、2006b)。この点でアパデュライの文化理論、ナショナリズム論は、上述したような問題点は内包しつつも検討していくに足

る理論であると思われる。本稿ではその検討は端緒についたばかりで不十分なものであったが、公共圏とナショナリズムの問題を考えていくためにアパデュライ理論(と他のポストコロニアリズムの理論家たちの「ディアスポラ」論)を検討していきたい。

註

1 ネグリ-ハートは『帝国』の「序」において同書の目的を「帝国のただなかで、かつまた帝国に抗して理論化を行い、行動するための一般的な理論的枠組みと概念の工具箱」をもたらすこと(ネグリ-ハート、2003、10頁)だと述べているが、ここへの註に以下の記述がある。「私たちのこの本が帝国に関する分析と批判の地勢を準備した唯一の書物だというわけではもちろんない。「帝国」という用語は用いなかったにせよ、私たちは多くの著者たちがこの方向に向っていると理解している。そのうちもっともよく知られている名前だけを挙げるなら、フレデリック・ジェイムソン、デヴィッド・ハーヴェイ、アージュン・アパデュライ、ガヤトリ・スピヴァク、エドワード・サイード、ジョバンニ・アリギ、アリフ・ダーリクらがそうである。」(ネグリ-ハート、2003、572頁)ネグリ-ハートは帝国分析に向けて理論的方向を共有している論者としてアパデュライを評価している。

アパデュライ自身は先の邦訳書の中で、新しいグローバルな文化経済は複合的で重層的、かつ乖離的な秩序であり、その理論化はまだ始まったばかり(アパデュライ、2004、68-9頁)と論じてそれへの註に以下の記述を加える。

「例外的人物として重要な一人に、フレデリック・ジェイムソンがいる。ポストモダニズムと後期資本主義との関係をめぐる彼の著作から、本稿では多くの示唆を受けている。だが、……文化事象についてのマルクス主義的な物語をグローバル化させていくことは実に困難なことなのである(…)。こうしたなかで私の関心は、マルクス主義者の多くが嫌悪するかもしれないが、マルクス主

義的な物語の再構築を（遅延と乖離構造を強調することによって）開始することにある。このような再構築の試みは、第三世界内部の差異を抹消し、（フランスのポスト構造主義者が好むような）社会的指示対象を消去した上で、マルクス主義的伝統の物語としての正統性を残存させてしまう危険性を回避しつつ、グローバルな断定性、不確実性、そして差異への注視を喚起していかねばならない。」（アパデュライ、2004、354頁）

2 アパデュライの文化論の中で特徴的でも（筆者にとって）理解困難な概念として「乖離構造 disjuncture」がある。筆者の勉強不足からこの概念の理論的背景を理解することはできない。しかしあくまで現時点での推測でしかないのだが、この概念はドゥルーズ&ガタリ概念の影響ではないかと考えている。ドゥルーズ&ガタリは精神分裂の経験を「離接的総合 La synthèse disjonctive」と呼んでいる。あくまで言葉上の類似性しか指摘できないのだが、その関連性を示すのは次の箇所である。

「われわれが生きる今日の世界は、リゾーム的（Deleuze and Guattari 1987）いや精神分裂病的にさえ映る。」（アパデュライ、2004、61頁）（付言すれば、ヘルドのグローバリゼーション論の中にも、国家とグローバリゼーションの関係を示す概念として「乖離構造 disjuncture」という概念が用いられている（ヘルド、2002））

3 ただしこの論文を再録した著書においては当該の部分は削除されている（吉見、2003）。

参考文献

- アパデュライ、アルジュン 2004 『さまよえる近代』（門田健一訳、吉見俊哉解説）平凡社。（Arjun Appadurai, *Moderity at Large*, University of Minnesota Press, 1996.）
- ドゥルーズ、ジル&フェリックス・ガタリ 1986 『アンチ・オイディプス』（市倉宏祐訳）河出書房新社。（Gilles Deleuze et Félix Guattari, *L'Anti-Oedipe*, Minuit, 1972）
- 海老塚均 2006 「スポーツのグローバリゼーション、ナショナリズム」菊幸一他編著『現代スポーツのパースペクティブ』大修館書店。
- グットマン、アレン 1997 『スポーツと帝国』（谷川稔他訳）昭和堂。（Allen Guttmann, *Games and Empire*, Columbia University Press, 1994.）
- ヘルド、デヴィッド 2002 『デモクラシーと世界秩序』（佐々木寛他訳）NTT出版。（David Held, *Democracy and the Global Order*, Polity Press, 1995.）
- クリフォード、ジェームズ 2002 『ルーツ』（毛利嘉孝他訳）月曜社。（James Clifford, *Routes*, Harvard University Press, 1997.）
- Maguire, Joseph 1999 *Global Sport*, Polity Press.
- ネグリ、アントニオ&マイケル・ハート 2003 『帝国』（水嶋一憲他訳）以文社。（Michael Hardt & Antonio Neguri, *Empire*, Harvard University Press, 2000.）
- 鬼丸正明 2006a 「スポーツ・グローバリゼーション・公共圏」高津勝・尾崎正峰編『越境するスポーツ』創文企画。
- 鬼丸正明 2006b 「スポーツ・映像・社会」『一橋大学スポーツ研究』第25巻、一橋大学スポーツ科学研究室。
- 鈴木慎一郎 2000 『レゲエ・トレイン』青土社。
- 吉見俊哉 1999 「ナショナリズムとスポーツ」井上俊・亀山佳明編『スポーツ文化を学ぶ人のために』世界思想社。
- 吉見俊哉 2003 『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』人文書院。